

越境としての留学

刈野 昌 (Sakae Fuchino)

25年2月15日 (16時45分 (日本時間)) 版

以下の文章は、現代思想二〇二四年11月臨時増刊号「特集*わたしの留学記」に寄稿した論説の拡張版である。雑誌掲載版では紙数の制限などのために削除した部分も復活させている。また、投稿後/校正後の加筆訂正も含まれる。拡張版で加えられたテキストの主なものは、dark green (1)の文の foreground (色) で色付けしてある。

このテキストの最新版は、

<https://fuchino.ddo.jp/misc/https://fuchino.ddo.jp/misc/%E7%95%99%E5%AD%A6-2024-x.pdf>
として download することが可能です。

1 インターネット時代の前の留学

この特集は、多分、これから外国に留学したい、と思っている人たちの参考になるような作文を集めたもの、というような意味合いも持つことになるものなのではないかと想像します。でも、そういうものなのだとすると、私自身の留学の体験談は、その役にはあまりたたないのではないかとこのような気もします。

私がドイツ(当時の西ドイツ)に留学したのは、20世紀の後半で、1979年に移住して、1997年までヨーロッパ(主に西ベルリンと東西ドイツ統合後のベルリン)に住んでいました。ただし、「留学」が、その土地の学校や大学の学生として滞在すること、ということだとすると、移住してから数年後には、ドイツの大学の先生になっていたのです、留学は1979年から数年間ということになります。

これは、テレビやラジオや国際電話はあったけれど、インターネットやPCや携帯やタブレットなどが出てくるよりずっと前の時代です。今考えてみると、インターネットもPCも携帯もなかった時代に、よく外国に移住できたものだと自分ながら感心してしまいます。外国に移住するために修得しなくてはいけなくなる語学だって、インターネットのない時代では、紙の本の教科書だけが頼りだったわけだし、辞書だって重くて分厚い紙の本です。

カルチャーショックという言葉がありますが、当時の留学（あるいはより一般的に海外移住）でのカルチャーショックは本当にショック以外のなにものでもなかったような気がします。行こうとしている外国（当時の私の場合にはドイツ）やその国の文化歴史に関する情報を集める手立てだって、今ならインターネットを活用することができるわけですが、当時は、そんなことができるわけもなく、ドイツやヨーロッパについて書いてある本を何冊も買って片端から読んだ記憶があります。しかもこのとき、買って読んだのは、全部日本語で書かれた本で（当時は外国の本をネット上で購入することだって当然できなかったし、どんな本があるのか調べることも困難だったし、簡単には買い求めることができませんでした）、そのような本は日本人の外国に対するステレオタイプのエコーチェンバーでしかないかもしれない、かなり危険な代物だったかもしれないものでした。そのとき読んだものの中には、実際に、そういうものに近いものも含まれていましたが、幸い、故小塩節先生の書かれたもの（たとえば、「4」や、「5」。もっとも後者はそのとき読んだのではなく、ドイツから日本に休暇で帰ったときに買って読んだのですが）など、深い内容のものもあって、このときのドイツに関する日本語の本の読書は、全体としては無駄にはならなかった、とは思いますが。ただし、もし似たことを、私が今やらなくてはならないとしたら、その場合でも印刷された本も読むかもしれないけれど、情報源として主に読むのは、ファイルの本であることが多いだろうし、日本語のものだけでなく、英語やその他の言語の本も沢山含まれているし、本や文書だけではなく、たとえば、「Easy German」のよゝな、YouTubeのドイツ語教育のチャンネルなどを見てドイツ語の聞き取りの勉強と現代ドイツについての様々な情報を得ることの二挙両得を図ったりもするだろうと思います。

そういった背景から、ここで書けるモラルとしては、昔は留学は大変なことだったけれど、今は、インターネットやPCや携帯やタブレットがあるので、そういうtoolsを活用すれば、昔に比べてずっと簡単に気楽にできるようになっているから、皆さんどんどんやってみてください、というようなものになるしかない

ように思えます。

「気楽にできるようになっていいるのだから」と無責任に言っているように見えるかもしれませんが、私は、前世紀の終りに日本に再移住した後に、ヨーロッパやアメリカに数週間から数ヶ月滞在する、ということは何度もしています。その際に、この今世紀になってから使えるようになってきた、「インターネットやPCや携帯やタブレット」のおかげで、昔に比べて、知らない土地に行くことがすぐ楽だったので、その経験をもとに言っているわけです。

でも、私の主観で「楽になった」と感じたことには、案外、昔の「留学」で（今のスタンダードから見ると無駄に労力を費して）つちかった語学力や、（今思い出してみると「冒険」に近かったかもしれない）実地訓練で磨いた異文化交流の技術(?)のようなものも貢献しているかもしれません。これについては、後でもう少し書いてみたいと思います。

2 越境としての留学と、お伊勢参りとしての留学

でも日本からの留学、ということだったら私の時代より前の、まだテレビも国際電話もなかったけれど、ラジオや電報はあった時代の留学だってあるし、それらもなかった時代の留学や、もっとずっと遡ると、1000年以上前の遣唐使のような、決死の留学だってあったわけです。

それで思い出すものに、杉浦日向子の『前夜』と題されたマンガがあります。これは「ニッポニア・ニッポン」¹⁾「6」に収録されているもので、明治時代の、外国に留学しようとしている二人の若者の出発前夜に催された壮行会を描いた短編です。宴たけなわ、二人は会場を抜け出して夜風にあたります。「今朝親父の位牌

1) 「再移住」という単語を使いましたが、これは、この作文の前後に、ドイツで外国人排斥の運動がメインストリームになりかけてきて、「強制送還」の eulhemism として “Reimmigration” (再移住) という単語がさかんに使われるようになっていくことへの、あてこすりです。

にいとまごいさせられたよ。」「おふくろの奴水盃でも交さんばかりサ。」「うん。」「だからこのごろじゃ留学なんざ伊勢詣と同じで猫も杓子(しゃくし)も行くんだと言ってやったんだ。」「はッ伊勢詣とはいい。」「



でも、本当のところ、当時の留学は、遣唐使の命懸けの旅行のようなものではなかったかもしれないけれど、伊勢詣よりは、もう少し大胆な冒険だったかもしれない。日向子さんの話の中の青年たちは、そのことにあえて触れはしないけれど、これから何年か、日本に帰ってこれれないし、ひよっとしたら生きて帰ってこれれないかもしれない日本との別れに、偶然、近くの家の窓から聞こえてくる、長唄のお稽古に聴きいっています。

私が留学した、これより二〇年後の(こちらは現実の)日本でも、出発前夜の私は、主観的にはかなり大胆な冒険をすることになるのではないか、という不安や興奮の入り交じったものを感じていたかもしれません。実際、冒険は西ベルリンに到着してすぐに始まりました。別便で送った荷物が間違っって東ベルリンに送られてしまい、これを西ベルリンに送ってもらう手続きをしなくてはならなくなっ

て、郊外のエアカーゴの倉庫のようなもののある場所の事務所に行っって交渉した

のですが、今思うと当時のドイツ語の語学力でいったいどうやってコミュニケーションがとれたのか不思議です。

まだXがtwitterだった頃、この話をそこに英語で書いたら、ソウル出身の若い友人が、これってソウル行きの荷物がピョンヤンに着いてしまった、というような話だよね、僕だったらへこむと思う、とコメントしてくれましたが、本当にそんな感じがありました。

遣唐使の頃でもそうだったのでしようが、明治の留学生は、外国で学んできた学問や知識を祖国の役にたてる、という使命を担っていました。だから、これは、比較的短期間の外国滞在の後日本に帰ってくるのが前提の留学なわけですが、学問自身が目的の留学では、必ずしも日本に帰ってくるのが最終目的になるとは限らないし、留学先とはまた別の外国に移住することになることもあるかもしれません。私の場合には、ヨーロッパに18年ほど住んだ後、結局また日本に移住することになったのですが、日本への移住が私の研究者としての人生にとって間違った決断ではなかったのだろうか、というのは、ときどき考えることではありますし、この作文を依頼されて改めて考えたところでもあります。とは言っても、現在研究が手詰まりになっているわけでは全然なくて、逆に、大きな理論が完成真近になってもいるので、日本では、研究を続けられるために私生活では大きな犠牲を払わざるを得なかった、ということとは別としても、日本への移住をしなかった自分を考えてみるというのは、あまり意味のない仮説上の議論でしかないと言えるかもしれないようにも思えます。

この18年というヨーロッパで生活した期間は、それほど長い時間ではなかったかもしれないし、日本に再移住してからでも、既に、これ以上の時間がたっただけで済んでいるのですが、ビゴ (Georges Bigot, 1860(安政7年)～1927(昭和2年))が日本に滞在したのも18年間だったので、そう比べてみると、結構長い期間だったと言いうこともできるのかもしれないとも思っています。

現代では、学問をするための留学ということだけで言えば、実のところ、別に

外国に行っても行かなくてもそれほど変わりはない、とも言えるわけです。たとえば zoom でセミナーや勉強会やティーチングのセッションをするというような状況では、時差が問題にはなるかもしれないし、実験科学では状況は少し地学かもしれないけれど、それを除けば、どこにいても別に変わりなく学習や討論や研究に参加できる、とも言えます。私は、今、イタリア人の若い数学者と、日本人の若い数学者と3人で毎週 zoom の研究セミナーを行なっています。勉強会というよりは、議論をして共著の論文¹³を書き上げてしまおう、という研究討論です。このセミナーの参加者のイタリア人の数学者は、日本の私のいる場所でポスドクをしていて、一緒に (in person の) 別のセミナーの主催もしているのですが、日本人の数学者の方は、ポスドクでオーストリアにいます。こういうセミナーをしていると、時差のことや、それぞれが住んでいる場所の話題が雑談であがることはあるけれど、それを除くと、誰がどこの国にいるとか、誰が僕の歩いていける距離の場所に住んでいるか、などを殆ど意識することがないし、問題にもなりません。

とは言っても、これは共通語が確立している場合の状況でしょう。ただ、今は誰でも英語を話すので、英語でやっているかぎり、その巧拙の度合みたいなものはあるかもしれませんが、使っていれば慣れるということもあるので、言葉の壁は、それほど問題にはならないのではないかと思います。

一方、私がドイツに留学した頃には、ドイツで勉強するためには、ドイツ語が話せたり書けたりすることが必須でした。まだインターネットのない時代に、ドイツ語でコミュニケーションがとれたり論文が書けたりするようになるための語学学習を短期間に集中的にしなくてはならなかったのですが(私は高校や大学での第二外国語はフランス語だったので、ドイツ語はほとんどゼロからの出発でした)、語学学習というのはやればなんとかなるものではある、とは言っても、当時は苦しい思いをしました。留学生として書いた、学位論文(Diplom)という学士と修士の間くらいの位置にある論文)もドイツ語でした。博士論文とハビリタツチオン

(教授資格)論文は英語で書いていますが、これは、副査がカナダの大学の人のため(二人違う人でしたが兩人ともトロント大学に所属する人でした)、という理由で特別に申請して許してもらったものです。

In § 3 zeigen wir dann als ein weiteres Resultat von Shelah, daß sich der Hauptsatz 2.11 unter Voraussetzung von \aleph_1 -Kategorizität ohne zusätzliche mengentheoretische Annahmen beweisen läßt (Satz 3.3). Dieser Satz beantwortet eine Frage von J.T. Baldwin in [Fr] (siehe Korollar 3.4). § 4 ist ein leichtes Kapitel, in dem modelltheoretische Begriffe wie Amalgamierungseigenschaft, universelle und homogene Modelle in den Rahmen dieser Arbeit eingeführt werden und ihr Zusammenhang untersucht wird. In § 5 wird ein Satz bewiesen, der dem "Stability Theorem" von Lindström entspricht (Satz 5.3). Eine Verallgemeinerung dieses Satzes (Lemma 6.1) spielt in § 6 eine entscheidende Rolle beim Beweis von Satz 6.5 der ein Schlüssel des Beweises von Hauptsatz 2.11 ist, und dessen Beweisidee auf die des ersten Satzes von Lindström (siehe z. B. [EFT]) zurückzuführen ist. Mit Hilfe der in § 4 und § 6 entwickelten technischen Mittel beweisen wir in § 7 den Satz 3.1, aus dem der Hauptsatz 2.11 folgt. In § 8 wird das Beispiel 2.1 B) in § 2 näher betrachtet, aus dem folgt daß der Hauptsatz 2.11 wirklich eine Verallgemeinerung von Satz 1.0 ist. Wir werden dann in § 9 eine Verallgemeinerung des Satzes von Morley und Lopez-Escobar beweisen (Satz 8.5), dessen Folgerungen (Satz 9.8 und 9.9) im Beweis von Satz 3.3 und Lemma 6.5 benötigt wurden. In § 10 zeigen wir eine Anwendung von Hauptsatz 2.11 auf die Theorie der archimedisch total geordneten Gruppen.

Ich bedanke mich sehr bei Prof. J.A. Makowsky, der mir Anlaß dazu gegeben hat, mich mit diesem Thema zu beschäftigen. Ich bedanke mich auch bei Dr. D. Giorgetta und Prof. S. Koppelberg, die mein Manuskript ausführlich gelesen haben und mir einige sehr nützliche Hinweise und Kritik gegeben haben. Ich muß mich auch bei Herrn E. Schöneburg bedanken, mit dem ich eine Wette eingegangen war, wonach ich ihn zu einem japanischen Essen einladen sollte, wenn er mehr als 30 sprachliche Fehler in meinem Manuskript entdeckte. Ich muß hier leider bestätigen, daß ich ihm deshalb jetzt (19.9.83) noch ein Shoo-jin-ryoori (japanisches vegetarisches Gericht) schuldig bleibe.

Diplom 論文 [1] の前書きの最後のページ。ページの最後で触れている、当時の指導教官の一人の Giorgetta 先生は最近亡くなられてしまいましたが、もう一人の指導教官だった Makowsky 先生は御健在で、つい最近、彼の誕生日記念論文集に掲載予定の論文 [2] を書いたところです。

現代のヨーロッパでは、欧州連合の発展にともなって、英語が大学での共通語として使われるようになった結果、ドイツやオーストリアに留学したりポストドクで滞在する人たちの多くはドイツ語を全く勉強しないで済ませてしまっていることも多いようで、これについては、隔世の感があります。

たとえば、先に言った ZOOM セミナーの参加者の日本人の人はオーストリアでは全部英語でやっているようです。逆に、日本に住んでいるイタリア人の人は、私自身は彼とは英語でしか話さなければいけません、実は日本語がかなり流暢に話せるようになっていきます。そういうこともあって、オーストリアはドイツ語圏なのですが、ドイツに留学したときの自分を投影して考えることが多いのは、この今オーストリアに住んでいる日本人の数学者であるより、むしろ日本に住んでいるイタリア人の数学者の方のように思えます。

でも、昔には効率よく語学を勉強するための *method* がなくて、今だったら無駄に余計な時間をかけないでも済んだかもしれないことを除くと、今では

第2母語と言えるようなものになっているドイツ語を勉強したこと、あるいはせざるを得なかったこと、自体は、それほど後悔しているわけではありません。考えるときに使える言語が複数あることは、今では私の個性の一部になっているので、そうでない自分を考えることができない、ということもあるのですが、多言語の言語生活は私の知性の地平線を拡張することに大きく貢献たし、今でもしている、と少なくとも自分では感じています。

3 違いが分かるためには、何が同じかが分っていない といけない、という二つと、あるいはその逆

世界には、自分の文化は特殊で、自国と「外国」の間に大きな文化の壁が横たわっている、と感じている文化と、むしろ世界は（自分達と対等でないところにたらない文化を別にすると）すべて自分の文化と同じものである（べきである）し、「文化の壁」は技術系な問題にすぎない、と思っている文化の、二通りがあるように思えます。この認識自体も流動的なもので、同じ国の中でも、個人個人の立場や教育の違いで、このことに関する世界観が全く違うこともありえるので一般論はちょっと危険かもしれませんが。そうだとしても、このような分類で考えたときには、日本は確実に前者に属すのではないかと思えます。現代ドイツは、この二つの世界観が拮抗して対立している、という状況を呈しているように思えます。これに、第二の diversity を尊重する、二つの世界観のどちらかに属すとも直ちには言えない、保守的な人たちがリベラルであると批判するところの立場がからんでくるわけですが…

ただし、この50年間くらいで、この「日本は特殊な国で、「日本」と「外国」という二分律が成立する」と思い込んでいることと思ひ込みの度合やその質は、ずいぶん変わってきたかもしれません。だから、私が私自身の体験談をここでしてしまふと、時代錯誤以外の何ものでもなくなってしまう可能性も大なのですが、あ

えて言うってしまうことにすると、留学は、この日本を特別な国だと思っ
ているという思い込みを矯正する絶好のチャンスだと思えます。

この作文の始めの方で、「カルチャーショック」について言及しましたが、私が
ドイツに留学した当初のカルチャーショックの大きな部分を占めていたのは、こ
の「日本は特殊な国」だという思い込みを突き崩すものだったように思います。ド
イツに留学した当初、「日本とドイツ（あるいは日本とヨーロッパ）にこんな類似
点があったのか」というショックが、私のカルチャーショックの大きな部分を占
めていたように思えます。

この、「日本が「外国」に比べて、それほど特殊な国でないこと」の理解の内訳とし
ては、背景が同じでないように見えるのに、実現された現実が実はほとんど同型
なものになっている、という種類の類似性の認識もあるし、実現された現実が違
うのに、その背景になっているものを考えてみると、そこに大きな共通点が見出
されるといふ種類の認識もあります。いずれにしても、これらを認識できるため
には、ある一定の知性や知的作業が必要になるのではないかとは思いますが、こ
のようなことを、具体例も含めてきちんと議論をするには、この作文で与えら
れた紙数ではいずれにしても無理なので、ここではこれに踏み込むことはしない
ことにします。

一方、違うと思っていたものが、予想に反して似ていたり本質的な同一性を持っ
ていることに気付いたときには、逆に小さな違いの集積が別の意味を持つてくる
ことになるでしょう。私がドイツに留学したときに感じた、そういう意味での小
さな違い方の例については、思いついたものを、いくつか挙げてみる事ができ
ます。ひとつは「天国」の方向です。私自身は母方がプロテスタントで日本では
アメリカ人の牧師の先生が日本人にむけて開いていたBible classに参加したりも
していたので、平均的な日本人に比べてキリスト教のバックグラウンドがあるつ
もりだったのですが、「天国」については、日本的、神道的とも言える汎神論的無
方向性で捉えていたので、ドイツ人にとって「天国」がはっきりとした上方向を

持っていることを知ってショックを受けたことを憶えています。

インターネットがあるから、どこにいても同じだみたいなのを書きましたが、こういうショックは対面で人と向きあって、しかもローカルの言語（私のこの場合にはドイツ語）で話してみないと体験できないことでしょう。

もうひとつの小さな違い、というか、違いのパターンとして思い出すものに、言語の語彙のカテゴリーの構造の違いがあります。たとえば、ドイツ語では、動物 (Tier) と言ったときに、魚も虫もこれに含める、というのを初めて知ったときに非常に奇異に感しました。日本語では、「動物」は日常会話で言ったときには主に脊椎動物で、虫や魚はこれには含まれなくて、虫を指して „Das Tier ist ...“ (この動物が...) とは言わないでしょう。近世の日本では、脊椎動物は食べてはいけないことになっていて、魚や虫は食べていたけれど、ドイツの文化では脊椎動物を食べべていて、虫は食べなかったが魚は少し食べた、というような文化の違いが、この語彙のカテゴリー構造の違いに現れているのかもしれませんが。現代では、日本人は脊椎動物 eaters に完全に改宗しまっていて、世紀の変わり目前後に欧米の若い世代を圧巻した *vegan* 文化には目もくれなかった、というようなこともあるので、日本人の若い人とは、この奇異感をあまり共有できないかもしれないですが。この、文化の類似性や違いを実体験で経験する、というのは、留学の主要目的ではなくても、留学の意義の大きな部分を占めることになる可能性があるでしょう。英語圏以外の場所でローカルな言葉を無視して英語だけでサヴァイヴを試みるのは、効率が良いとも言えるかもしれないけれど、重要ですばらしいものであるはずの体験を全部スキップしてしまう、ということでもあるようにも思えます。

4 Faulty generalization \searrow confirmation bias

留学も含めて、外国に行くことは、前世紀の中頃くらいまで、日本では普通の人ができることではなかったので、外国に行ったことのある人は、自分の体験を

特別なこと、として自慢することができたし、そうしがちでした。そういう人たちが、たまたま体験したことを普遍的な事実と誤認してしまったり、そのようなものとして語ってしまいがちだ、ということも、ありがちなことだったように思います。

外国に出ることが、ごく普通の体験になってしまった今では、そのような、間違った一般化による誤解を語ってしまう人は少なくなっている、とは思いますが、「外国では」とか「アメリカでは」とか「我々日本人は」とかやたらと big subjects を置いて議論したがる人というのは、今でも沢山いるので、注意が必要だし、自分がそれをやってしまわないように気をつけるべきでしょう。特に、日本語は様相表現や量化表現が得意でない言語なので、変な一般化や断定が、言語レベルのデフォルトで自分の気がつかない間にされてしまっている、という危険だってあります。

外国で見聞きすることの認識がゆがんものになってしまう原因には、心理学で confirmation bias と呼ばれるメカニズムもあります。たとえば、既に書いたように、私はドイツに留学する前に、ドイツに関する本を山のように読んだわけですが、実際にドイツに行ったときに、無意識的、あるいは意識的に、読んだ本に書いてあったことの裏付けになるような事実を選択的に受入れようとしてしまう危険があるし、多分多かれ少なかれそれをしてしまっていたのではないかと思えます。私の場合ヨーロッパに18年間も住んだので、そういう先入観の上塗りになっっている見方を訂正するだけの時間があっただけと思うのですが、先入観にとらわれていると、その場所に実際に何年も住んでいても、ずっと最初の先入観から物を見てしまう見方の修正ができないでいる、ということだってありえます。

5 私の留学体験

前の節で萌黄色のフォントで組んだパラグラフのすべてと同様、この節以降に書くことも、『現代思想』に掲載されている文章には全く含まれていません。これは主に、字数制限を超えてしまったからです。逆にそのことを逆手に取って、この節では、一般雑誌には書きにくい、主に私の研究分野に近い分野の専門家を聴衆にした、本来の留学体験記を話を書いてみようと思います。

私が留学を考えた頃、頭にあったのは、数理論理学の基礎づけに関連する問題でした。当時竹内外史先生の書かれた教科書の影響でフォーマルな証明論よりの議論に固執していて、卒論に書いたのも、ゲーデルの $\neg \equiv \neg$ による連続体仮説の相対的無矛盾性証明をゲンツェンの証明の体系での証明論として考えたときにどのように表現できるか、という問いに対する答えでした。

一方、西ベルリンでの当時の数理論理学は、これは、迂闊にも留学してみてもら分かったのですが、証明論的なスタンスをほとんどとらない、つまり論理学を集合論的な枠組の中で(普通の)数学の手法の一つとして、モデル理論的なスタンスで扱かう、というスタイルの数理論理学でした。

このことは、全く偶然の所業だったとしか言いようがないのですが、振り返ってみると、私の研究の始まりが、形式論理の勝った視点から出発して、「集合論的数学」を経由するものになったことは、まさに、現在の私の研究の重点である集合論の基本問題の研究への道を準備するようなものだったように見えることには、感慨を覚えます。

これは、実は逆に自分がやってきたことしか応用できていないから、なのかもしれないのですが、これまでその時々興味でやってきたように見える研究が今振り返ってみると、現在の研究に向けて、ほとんど一列に並んでいるように見えるように思えます。Diplom 論文に関連して勉強していた stationary logic や無限論理のモデル理論や、博士論文を書き上げて後にやった仕事で、当時、私がこの

理論の発足の契機を作ることになった bounded forcing axioms など、昔やっていたことが全部最近の研究の中で、より一般的な枠組の中に統合することができているのは偶然か、予定調和なのか。

私の留学では、ベルリンに移住してから一年後には、数学科のチューターの職について、それできりぎり生活ができていたのですが、Diplom 論文を書きあげて、学生生活を終えて、ハノーバー大学の数学科の助手になったのが1984年で、私の「留学」時代はここで幕を閉じることになります。

6 ChatGPT 時代の語学学習

ドイツに住んでいた最後の頃には、EUでの対応向けての議論が走りはじめていて、EUのサポートを受けた自動翻訳のセミナーがベルリンで走りはじめていて、これに参加していたのですが、当時、まだ夢のような話だったことが、現在か那里的ところまでできているので、これは夢のような気がします。

自動翻訳やその他のAIツールズがあるので、語学を勉強する意味がなくなったり、と主張する人がいるのには、驚かされます。勉強のきらいな人、というがいるみたいなので、そういう人が何でも理由にして、勉強する意味がなくなった、と言ってみているだけなのかもしれません。

実のところ、自動翻訳やその他のAIツールズがあるので、外国語の勉強をしたときに、高い習熟度に到達できる可能性や、そのスタンダードが格段に上がった、というのが現状でしょう。この意味では、いくら勉強しても外国語が身につかない、という状況が起りにくくなって、語学、特に複数の言語を勉強する意味が増した、と言えるのではないのでしょうか。これは「留学」をしようとしている人にとっては朗報と言えるでしょう。実際、YouTube などを見ていると、母語として言語を学習できる年齢を過ぎてから学習した言語をほとんど完璧にあやつる若い人が沢山いるのに驚かされます。

「この項はまだ書きかけです。work in progress として、このファイルを、順次書き進めたものご update します。」

参考文献

- [1] Sakae Fuchino, *Klassifikationstheorie nicht-elementarer Klassen*, Diplomarbeit, Berlin, (1983)
- [2] ———, Reflection and Recurrence, to appear in the Festschrift on the occasion of the 75. birthday of Professor Janos Makowsky, Birkh.: user, (202?). <https://arxiv.org/pdf/2410.20343>
- [3] S. Fuchino, T. Gappo, and F. Parente, Generic absoluteness revisited, submitted. <https://arxiv.org/abs/2410.15384>
- [4] 小塩節、『ドイツの森』英友社 (1976).
- [5] ———, 『ブレンナー峠を越えて ヨーロッパ芸術の光と影』音楽之友社 (1982).
- [6] 杉浦日向子, 『ニッポン・アニッポン』ちくま文庫、筑摩書房 (1991).